山椒大夫

森鴎外

えたばかりの女で、二人の子供を連れている。姉は十四、弟は十二である。それに四十ぐ 越後の春日を経て今津へ出る道を、珍らしい旅人の一群れが歩いている。母は三十歳を踰ぇҕご、ゕゖが

と言って励まして歩かせようとする。二人の中で、姉娘は足を引きずるようにして歩いて いるが、それでも気が勝っていて、疲れたのを母や弟に知らせまいとして、折り折り思い らいの女中が一人ついて、くたびれた同胞二人を、「もうじきにお宿にお着きなさいます」

出したように弾力のある歩きつきをして見せる。近い道を物詣りにでも歩くのなら、ふさ

誰の目にも珍らしく、また気の毒に感ぜられるのである。 わしくも見えそうな一群れであるが、笠やら杖やらかいがいしい出立ちをしているのが、

道は百姓家の断えたり続いたりする間を通っている。 砂や小石は多いが、 秋日和によく

乾いて、しかも粘土がまじっているために、よく固まっていて、海のそばのように 踝 を埋

めて人を悩ますことはない。

いるところに通りかかった。 それに夕日がかっとさして

「まああの美しい紅葉をごらん」と、先に立っていた母が指さして子供に言った。

に染まるのでございますから、 子供は母の指さす方を見たが、なんとも言わぬので、女中が言った。 朝晩お寒くなりましたのも無理はございませんね 「木の葉があんな

姉娘が突然弟を顧みて言った。「早くお父うさまのいらっしゃるところへ往きたいわね」

「姉えさん。 まだなかなか往かれはしないよ」弟は賢しげに答えた。

河や海をお船でたびたび渡らなくては往かれないのだよ。 母が諭すように言った。「そうですとも。 今まで越して来たような山をたくさん越して、 毎日精出しておとなしく歩かな

「でも早く往きたいのですもの」と、姉娘は言った。

一群れはしばらく黙って歩いた。

向うから空桶を担いで来る女がある。 塩浜から帰る潮汲み女である。

の毒な。 潮汲み女は足をとめて、主従四人の群れを見渡した。そしてこう言った。 それに女中が声をかけた。 あいにくなところで日が暮れますね。 「もしもし。この辺に旅の宿をする家はありませんか」 この土地には旅の人を留めて上げる所は一 「まあ、 お気

二人の子供は、 女中が言った。 はずんで来る対話の調子を気にして、 「それは本当ですか。どうしてそんなに人気が悪いのでしょう」 潮汲み女のそばへ寄ったので、

女

軒もありません」

中と三人で女を取り巻いた形になった。

しかたがありません。 潮汲み女は言った。 もうあそこに」と言いさして、 「いいえ。信者が多くて人気のいい土地ですが、 女は今来た道を指さした。 国守のかみ \mathcal{O} 「もうあ だから

書いてあるそうですが、 そこに見えていますが、 近ごろ悪い人買いがこの辺を立ち廻ります。それで旅人に宿を貸 あの橋までおいでなさると高札が立っています。それにくわしく

して足を留めさせたものにはお咎めがあります。 あたり七軒巻添えになるそうです」

「それは困りますね。子供衆もおいでなさるし、 もうそう遠くまでは行かれません。 どう

にかしようはありますまいか」

「そうですね。 わたしの通う塩浜のあるあたりまで、 あなた方がおいでなさると、 夜にな

往ってあげましょう」 持ち主のところにいます。 なっている所があります。 が 0 して来た材木です。 の石垣にぴったり寄せて、 ありますまい。 てしまいましょう。どうもそこらでい わたしの思案では、 昼間はその下で子供が遊んでいますが、 そこなら風も通しますまい。 河原に大きい材木がたくさん立ててあります。荒川の上から流 ついそこの 作はそ あそこの橋の下にお休みなさるがいいでしょう。岸 い所を見つけて、 の森の中です。 わたしはこうして毎日通う塩浜の 夜になったら、 野宿をなさるよりほか、 奥の方には日もささず、 藁や薦を持って しかた

も敷かせたりきせたりいたしとうございます」 み寄って言った。 往って休みましょう。 子供らの母は一人離れて立って、この話を聞い 「よい方に出逢いましたのは、 どうぞ藁や薦をお借り申しとうございます。 わたしどもの為合せでございます。 ていたが、このとき潮汲み女のそばに進 せめて子供たちにで

潮汲み女は受け合って、 柞の林の方へ帰って行く。 主従四人は橋のある方へ急いだ。

に一群れは来た。 潮汲み女の言った通りに、 11

が立っている。書いてある国守の掟も、女の 詞 にたがわない。

留めさせまいとして、行き暮れたものを路頭に迷わせるような掟を、 ただそういう掟のある土地に来合わせた運命を歎くだけで、 \mathcal{O} か。 ふつつかな世話の焼きようである。 いが立ち廻るなら、 その人買い の詮議をしたらよさそうなものである。 しかし昔の人の目には掟である。 掟の善悪は思わない。 国守はなぜ定めたも 子供らの母は

はい なるほど大層な材木が石垣に立てかけてある。 橋の袂に、 った。 男の子は面白がって、 河原へ洗濯に降りるものの通う道がある。 先に立って勇んではい 一群れは石垣に沿うて材木の下へくぐって った。 そこから一群れは河原に降りた。

奥深くもぐってはいると、洞穴のようになった所がある。

下には大きい材木が横になっ

ているので、床を張ったようである。

男の子が先に立って、 横になっている材木の上に乗って、 一番隅へはい って、 「姉えさ

ん、早くおいでなさい」と呼ぶ。

姉娘はおそるおそる弟のそばへ往った。

「まあ、 お待ち遊ばせ」と女中が言って、背に負っていた包みをおろした。 そして着換え

の衣類を出して、 子供を脇へ寄らせて、隅のところに敷いた。そこへ親子をすわらせた。

子はここまで来るうちに、 母親がすわると、二人の子供が左右からすがりついた。岩代の信夫郡の住家を出て、親いれていると、二人の子供が左右からすがりついた。岩代の信夫郡の住家を出て、親 家の中ではあっても、この材木の蔭より外らしい所に寝たこと

がある。不自由にも次第に慣れて、もうさほど苦にはしない。

女中の包みから出したのは衣類ばかりではない。 用心に持っている食べ物もある。

はそれを親子の前に出して置いて言った。「ここでは焚火をいたすことは出来ません。 し悪い人に見つけられてはならぬからでございます。 あの塩浜の持ち主とやらの家まで往

0 て、 お湯をもらってまいりましょう。 そして藁や薦のことも頼んでまいりましょう」

女中はまめまめしく出て行った。子供は楽しげにやら、乾した、果 やらを食べはじめた。

ばらくすると、 この材木の蔭へ人のはいって来る足音がした。 「姥竹かい」と母親が

声をかけた。 しかし心のうちには、 柞の森まで往って来たにしては、あまり早いと疑った。

姥竹というのは女中の名である。

は いっ て来たのは四十歳ばかりの男である。 骨組みのたくましい、 筋肉 が 一つびとつ肌

 \mathcal{O} 上から数えられるほど、 脂肪の少い 人で、 牙 彫 の 人形のような顔に笑みを湛えて、

ころへ進み寄った。 数珠を持っている。 そして親子の座席にしている材木の端に腰をかけた。 我が家を歩くような、 慣れた歩きつきをして、 親子のひそんでい

ある。 親子はただ驚いて見ている。 仇をしそうな様子も見えぬので、 恐ろしいとも思わ \mathcal{O}

ことは、 誰に遠慮もいらぬ。 ろうと思い立った。 \mathcal{O} が立ち廻るというので、 男はこんなことを言う。 人を連れ 国守の手に合わぬと見える。 て帰った。 さいわいわしが家は街道を離れているので、 わしは人の野宿をしそうな森の中や橋の下を尋ね廻って、 見れば子供衆が菓子を食べていなさるが、 国守が旅人に宿を貸すことを差し止めた。 「わしは山岡大夫という船乗りじゃ。 気の毒なは旅人じゃ。そこでわしは旅人を救うてや こっそり人を留めても、 このごろこの土地を人買 そんな物は 人買いをつかまえる これまで大 腹 の足しに

たい志に感ぜずにはいられなかった。 どうぞ遠慮せずに来て下されい」男は強いて誘うでもなく、 はならいで、歯に障る。 ^{さわ} 子供の母は 貸すなという掟のある宿を借りて、 つくづく聞いていたが、 わしがところではさしたる饗応はせぬが、芋粥でも進ぜましょう。 そこでこう言った。 世間の掟にそむいてまでも人を救おうというありが ひょっと宿主に難儀をかけようかと、 独語でとりごと 「承われば殊勝なお心がけと存 のように言ったのである。 それ

根の下に休ませることが出来ましたら、 気がかりでございますが、 わたくしはともかくも、 そのご恩はのちの世までも忘れますまい 子供らに温いお粥でも食べさせて、

して進ぜましょう」こう言って立ちそうにした。 岡大夫はうなずいた。 「さてさてよう物のわかるご婦人じゃ。そんならすぐに案内を

は今一人連れがございます」 話になるさえ心苦しゅうございますのに、 母親は気の毒そうに言った。 「どうぞ少しお待ち下さいませ。 こんなことを申すのは わたくしども三人が 1 かがと存じますが

山岡大夫は耳をそばだてた。 「連れがおありなさる。それは男か女子か」

「子供たちの世話をさせに連れて出た女中でございます。 湯をもらうと申して、 街道を三

四町あとへ引き返してまいりました。もうほどなく帰ってまいりましょう」

「お女中かな。 そんなら待って進ぜましょう」山岡大夫の落ち着いた、 底の知れぬような

顔に、なぜか喜びの影が見えた。

ここは直江の浦である。 日はまだ米山の背後に隠れていて、 お 青 こんじょう のような海の上には

薄い靄がかかっている。

群れの客を舟に載せて きもづな を解いている船頭がある。 船頭は山岡大夫で、 客はゆうべ

大夫の家に泊った主従四人の旅人である。

応 化 橋の下で山岡大夫に出逢った母親と子供二人とは、キラゥィのはレ 女中姥竹が欠け損じた瓶子にじょちゅううばたけ へいし

湯をもらって帰るのを待ち受けて、大夫に連れられて宿を借りに往った。

姥竹は不安らし

い顔をしながらついて行った。大夫は街道を南へはいった松林の中の草の家に四人を留め

て、 芋粥をすすめた。そしてどこからどこへ往く旅かと問うた。くたびれた子供らをさきいもがゆ

へ寝させて、 母は宿の主人に身の上のおおよそを、かすかな燈火のもとで話した。

自分は岩代のものである。 夫が筑紫へ往って帰らぬので、二人の子供を連れて尋ねに往っくし

く。 姥竹は姉娘の生まれたときから守りをしてくれた女中で、 身寄りのないものゆえ、 遠

い、覚束ない旅の伴をすることになったと話したのである。

さてここまでは来たが、 筑紫の果てへ往くことを思えば、まだ家を出たばかりと言って

船乗りであってみれば、 ょ れから陸を行ったものであろうか。 定めて遠国のことを知っているだろう。 または船路を行ったものであろうか。 どうぞ教えてもらいたい 主人は

と、子供らの母が頼んだ。

大夫は知れきったことを問われたように、 少しもためらわずに船路を行くことを勧めた。

陸を行けば、 じき隣の越中の国に入る界にさえ、 親不知子不知の難所がある。

まやしらずこしらず 削り立てた

ような巌石の裾には荒浪が打ち寄せる。旅人は横穴にはいって、波の引くのを待っていて、ょうなみ

狭い巌石の下の道を走り抜ける。そのときは親は子を顧みることが出来ず、子も親を顧み

ることが出来ない。それは海辺の難所である。また山を越えると、 踏まえた石が一つ揺げ

来る。 諸国の船頭を知っているから、船に載せて出て、西国へ往く舟に乗り換えさせることが出 頼めば、いながらにして百里でも千里でも行かれる。自分は西国まで往くことは出来ぬが 難所があるか知れない。 千尋の谷底に落ちるような、 あすの朝は早速船に載せて出ようと、大夫は事もなげに言った。 それとは違って、 あぶない岨道もある。西国へ往くまでには、どれほどのモゎみな。 船路は安全なものである。 たしかな船頭にさえ

夜が明けかかると、 から金を出して、宿賃を払おうとした。大夫は留めて、宿賃はもらわぬ、 大夫は主従四人をせき立てて家を出た。そのとき子供らの母は小さ

入れてある大切な嚢は預かっておこうと言った。なんでも大切な品は、宿に着けば宿の主人

に、舟に乗れば舟の主に預けるものだというのである。

ならぬような勢いになった。 子供らの母は最初に宿を借ることを許してから、主人の大夫の言うことを聴かなくては 何事によらず言うがままになるほど、大夫を信じてはいない。 掟を破ってまで宿を貸してくれたのを、 こういう勢いになった ありがたくは思って

のは、 自分が大夫を恐れているとは思っていない。 その抗うことの出来ぬ 大夫の詞に人を押しつける強みがあって、母親はそれに 抗 うことが出来ぬからであ のは、 どこか恐ろしいところがあるからである。 自分の心がはっきりわかっていない。 しか し母親は

母親は余儀ないことをするような心持ちで舟に乗った。 子供らは凪いだ海の、 青い氈を

敷いたような の下を立ち去ったときから、 面を見て、 物珍しさに胸をおどらせて乗った。 今舟に乗るときまで、 不安の色が消え失せなかった。 ただ姥竹が顔には、 きのう橋

山岡大夫は ともづな を解いた。 で岸を一押し押すと、 舟は揺めきつつ浮び出た。

山岡大夫はしばらく岸に沿うて南へ、 波が日にかがやく。 越中境の方角へ漕いで行く。 靄は見る見る消えもや

人家のない岩蔭に、 波が砂を洗って、 海松や荒布を打ち上げているところがあった。みる。あらめ そ

こに舟が二艘止まっている。船頭が大夫を見て呼びかけた。

「どうじゃ。あるか」

大夫は右の手を挙げて、 大拇を折って見せた。 そして自分もそこへ舟を舫った。 大拇だ

け折ったのは、四人あるという相図である。

前 からいた船頭の一人は宮崎の三郎といっ て、 越中宮崎のものである。 左の手の 拳になり を開

に いて見せた。 つけたのである。 右の手が しろもの の相図になるように、 左の手は銭の相図になる。 これは五貫文

「気張るぞ」と今一人の船頭が言って、 左の臂をつと伸べて、 一度拳を開い て見せ、 つい

ひとさしゅび を竪てて見せた。この男は佐渡の二郎で六貫文につけたのである。

「横着者奴」 と宮崎が叫 んで立ちかかれば、 「出し抜こうとしたのはおぬしじゃ」

が身構えをする。二艘の舟がかしいで、 舷 が水を 笞った。

お客さまがご窮屈でないように、お二人ずつ分けて進ぜる。賃銭はあとでつけた値段の割 どれも西国への便船じゃ。 じゃ」こう言っておいて、大夫は客を顧みた。「さあ、お二人ずつあの舟へお乗りなされ 大夫は二人の船頭の顔を冷ややかに見較べた。「あわてるな。どっちも空手では還さぬ。 舟足というものは、重過ぎては走りが悪い」

二人の子供は宮崎が舟へ、母親と姥竹とは佐渡が舟へ、大夫が手をとって乗り移らせた。

移らせて引く大夫が手に、宮崎も佐渡も幾緡かの銭を握らせたのである。

「あの、主人にお預けなされた嚢は」と、 姥竹が 主 の袖を引くとき、 山岡大夫は空舟を

つと押し出した

「わしはこれでお 暇 をする。 たしかな手からたしかな手へ渡すまでがわしの役じゃ。 ご機

嫌ようお越しなされ」の音が忙しく響いて、山岡大夫の舟は見る見る遠ざかって行く。 母親は佐渡に言った。 「同じ道を漕いで行って、同じ港に着くのでございましょうね」

佐渡と宮崎とは顔を見合わせて、声を立てて笑った。そして佐渡が言った。「乗る舟は弘誓

の舟、着くは同じ彼岸と、蓮華峰寺の和尚が言うたげな」
ゕのきし れんげぶじ おしょう

二人の船頭はそれきり黙って舟を出した。佐渡の二郎は北へ漕ぐ。宮崎の三郎は南へ漕 「あれあれ」と呼びかわす親子主従は、ただ遠ざかり行くばかりである。

母親は物狂おしげに 舷 に手をかけて伸び上がった。「もうしかたがない。 これが別れ

におし。 だよ。安寿は守本尊の地蔵様を大切におし。厨子王はお父うさまの下さった護り刀を大切がよんじゅ どうぞ二人が離れぬように」安寿は姉娘、 厨子王は弟の名である。

子供はただ「お母あさま、 お母あさま」と呼ぶばかりである。

えていて、 舟と舟とは次第に遠ざかる。 もう声は聞えない。 後ろには餌を待つ雛のように、二人の子供があ V た口が 見

ます。 漕いで行って下さいまし。 でございます。これから何をたよりにお暮らしなさいましょう。どうぞあの舟の往く方へ 姥竹は佐渡の二郎に「もし船頭さん、もしもし」と声をかけていたが、 とうとう赤松の幹のような脚にすがった。「船頭さん。これはどうしたことでござい のお嬢さま、 若さまに別れて、生きてどこへ往かれましょう。 後生でございます」 奥さまも同じこと 佐渡は構わぬ

さかさまに海に飛び込んだ。 「うるさい」と佐渡は後ろざまに蹴った。 姥竹は身を起した。 「ええ。 これまでじゃ。 姥竹は 奥さま、ご免下さいまし」こう言ってまっ かかとこ に倒れた。髪は乱れて舷にか

「こら」と言って船頭は臂を差し伸ばしたが、まにあわなかった。

た。 たお礼に差し上げます。わたくしはもうこれでお暇を申します」こう言って舷に手をかけ 母親は 袿きぎ を脱いで佐渡が前へ出した。 「これは粗末な物でございますが、 お世話にな 0

「たわけが」と、 佐渡は髪をつか んで引き倒した。 「うぬまで死なせてなるもの カシ

な貨じや」

漕い 佐渡の二郎は 牽 を引き出して、 で行った。 母親をくるくる巻きにして転がした。そして北へ北 へ と

うて南へ走って行く。 「お母あさまお母あさま」と呼び続けている姉と弟とを載せて、宮崎の三郎が舟は岸に沿 「もう呼ぶな」と宮崎が叱った。 「水の底の鱗介には聞えても、

の女子には聞えぬ。 女子どもは佐渡へ渡って粟の鳥でも逐わせられることじゃろう」

と一緒にすることだと思っていたのに、 姉の安寿と弟の厨子王とは抱き合って泣いている。 今はからずも引き分けられて、 故郷を離れるも、 二人はどうしてい 遠い旅をするも母

11 か わからない。 ただ悲しさばかりが胸にあふれて、 この別れが自分たちの身の上をどれ

だけ変らせるか、そのほどさえ 弁 えられぬのである。

午になって宮崎は餅を出して食った。そして安寿と厨子王とにも一つずつくれた。二人ひる

は餅を手に持って食べようともせず、 泣きながら寝入った。 目を見合わせて泣いた。 夜は宮崎がかぶせた苫 の 下

を売り歩いたのである。 こうして二人は幾日か舟に明かし暮らした。 宮崎は越中、 能の 登と 越前、 若狭の津々浦・

かし二人がおさないのに、体もか弱く見えるので、 なかなか買おうと言うもの が な 1,

たまに買い手があっても、 でも泣くか」と二人を打つようになった。 値段の相談が 調ととの わない。 宮崎は次第に機嫌を損じて、 「いつま

宮崎が舟は廻り廻って、 丹後の由良の港に来た。ここには石浦というところに大きいゅら

を構えて、 田畑に米麦を植えさせ、 山では猟をさせ、海では 漁などり をさせ、 、蚕飼をさせ、 機織はたおり

をさせ、 金物、 陶物、 木の器、 何から何まで、 それぞれの職人を使って造らせる山椒大夫

という分限者がいて、 人なら幾らでも買う。宮崎はこれまでも、 よそに買い手のない

あると、 山椒大夫がところへ持って来ることになっていた。

港に出張っ ていた大夫の y 奴頭· は、 安寿、 厨子王をすぐに七貫文に買っ

「やれやれ、 餓鬼どもを片づけて身が軽うなった」 と言って、 宮崎の三郎は受け取った銭

を 懐 に入れた。そして波止場の酒店にはいった。

抱えに余る柱を立て並べて造った大廈の奥深い広間に一間四方の炉を切らせて、********

がおこしてある。その向うに 茵 を三枚畳ねて敷いて、山椒大夫は「几」にもたれている。

左右には二郎、三郎の二人の息子が狛犬のように列んでいる。もと大夫には三人の男子がこまいぬ

今から十九年前のことである。 るのをじっと見ていて、一言も物を言わずに、ふいと家を出て行くえが知れなくなった。 あったが、太郎は十六歳のとき、逃亡を企てて捕えられた 奴 に、父が手ずから烙 印をす

奴 頭 が安寿、厨子王を連れて前へ出た。そして二人の子供に辞儀をせいと言った。ゃっこがしら

二人の子供は奴頭の 詞 が耳に入らぬらしく、ただ目をみはって大夫を見ている。今年六

十歳になる大夫の、朱を塗ったような顔は、額が広くが張って、髪も鬚も銀色に光ってい 子供らは恐ろしいよりは不思議がって、じっとその顔を見ているのである。

大夫は言った。「買うて来た子供はそれか。いつも買う 奴 と違うて、何に使うてよいかゃっこ

わからぬ、珍らしい子供じゃというから、わざわざ連れて来させてみれば、色の蒼ざめた、

か細い 童 どもじゃ。何に使うてよいかは、わしにもわからぬ」

さん。さっきから見ていれば、辞儀をせいと言われても辞儀もせぬ。ほかの奴のように名 そばから三郎が口を出した。 末の弟ではあるが、もう三十になっている。 「いやお父っ

弱々しゅう見えてもしぶとい者どもじゃ。奉公初めは男が柴苅り、 女が汐汲み

「おっしゃるとおり、名はわたくしにも申しませぬ」と、奴頭が言った。

ときまっている。その通りにさせなされい」

大夫は嘲笑った。 「愚か者と見える。名はわしがつけてやる。 姉はいたつきを垣衣、

三荷の柴を刈れ。 弟は我が名を萱 草じや。垣衣は浜へ往って、日に三荷の潮を汲め。ホゥナホィジキ 弱々しい体に免じて、 荷は軽うして取らせる」 萱草は山 へ往って日に

三郎が言った。 「過分の いたわりようじゃ。 こりや、 奴頭。 早く連れて下がっ て道具を

渡してやれ」

奴頭は二人の子供を新参小屋に連れて往って、 安寿には桶と杓、厨子王には籠と鎌をがす かき

渡した。 っているのである。 どちらにも午餉を入れるが添えてある。 新参小屋はほかの奴婢の居所とは別になぬる

奴頭が出て行くころには、 もうあたりが暗くなった。 この屋には燈火もない。

翌日の 朝はひどく寒かった。 ゆうべは小屋に備えてある 衾*** があまりきたない \mathcal{O} で、

王が薦を探して来て、 舟で苫をかずいたように、二人でかずいて寝たのである。

きのう奴頭に教えられたように、厨子王はを持って 厨 \sim 餉 を受け取りに往った。 屋根

とするので、 来て待っている。 Ļ 地にちらばった藁の上には霜が降っている。 一度は叱られたが、あすからはめいめいがもらいに来ると誓って、ようよう 男と女とは受け取る場所が違うのに、 厨は大きい土間で、 厨子王は姉のと自分のともらおう もう大勢の奴婢がぬる

のほかに、 面桶に入れたと、 木の椀に入れた湯との二人前をも受け取った。 **饘**は塩を入れ

て炊いである。

姉と弟とは朝餉を食べながら、 もうこうした身の上になっては、 運命のもとに 項に を屈め

るよりほかはないと、 けなげにも相談した。そして姉は浜辺へ、 弟は山路をさして行くの

である。 大夫が邸の三の木戸、 二の木戸、 一の木戸を一しょに出て、二人は霜を履んで、

見返りがちに左右へ別れた。

厨子王が登る山は由良が嶽の裾で、ゅらにはしまる 石浦からは少し南へ行 って登るのである。 柴を苅る

所は、 地に出る。 から遠くはない。 そこに雑木が茂っているのである。 ところどころ紫色の岩の露われている所を通って、 やや広い平

ばらくは手を着けかねて、 厨子王は雑木林の中に立ってあたりを見廻した。 朝日に霜の融けかかる、 黄ね しかし柴はどうして苅るものかと、 のような落ち葉の上に、 ぼんやりす

潮風が寒かろうと、 そこでまた落ち葉の上にすわって、 わ て時を過した。 ようよう気を取り直して、一枝二枝苅るうちに、厨子王は指を傷めた。 ひとり涙をこぼしていた。 山でさえこんなに寒い、 浜辺に行った姉さまは、

大夫のところの奴か、 がよほど昇ってから、 柴は日に何荷苅るのか」と問うた。 柴を背負って麓へ降りる、 ほかの 樵り が通りか かって、 「お前も

「日に三荷苅るはずの柴を、 まだ少しも苅りませぬ」と厨子王は正直に言った。

荷をおろして置いて、すぐに一荷苅ってくれた。 「日に三荷の柴ならば、 午までに二荷苅るがい · \ 柴はこうして苅るものじゃ」 樵は我が

浜辺に往く姉の安寿は、 厨子王は気を取り直して、 川の岸を北へ行った。 ようよう午までに一荷苅り、 さて潮を汲む場所に降り立ったが、 午からまた一荷苅っ

も汐の汲みようを知らない。 って行った。 心で心を励まして、ようよう 杓 をおろすや否や、 波が杓を取

隣で汲んでいる女子が、 ****ご 手早く杓を拾っ て戻した。 そしてこう言った。 「汐はそれでは

汲まれません。 どれ汲みようを教えて上げよう。 右手の杓でこう汲んで、 左手の桶でこうゅんで おけ

受ける」

とうとう一荷汲んでくれた。

分で少し汲んでみましょう」安寿は汐を汲み覚えた。 「ありがとうございます。 汲みようが、 あなたのお蔭で、 わかったようでございます。 自

隣で汲んでいる女子に、 無邪気な安寿が気に入った。二人は午餉を食べながら、 身の上

た女子である。 を打ち明けて、 姉も . 妹 の誓いをした。これは伊勢の小萩といって、二見が浦から買われて来ぅテヒぃ

柴も、 最初の日はこんな工合に、 荷ずつの勧進を受けて、 姉が言いつけられた三荷の潮も、 日の暮れまでに首尾よく 調 った。 弟が言い つけられた三荷の

恋しい、 山で姉を思い、 姉は潮を汲み、 佐渡にいる母が恋しいと、言っては泣き、 日の暮れを待って小屋に帰れば、二人は手を取り合って、 弟は柴を苅って、 一日一日と暮らして行った。 泣いては言う。 姉は浜で弟を思い、 筑紫にいる父が 弟は

とかくするうちに十日立った。そして新参小屋を明けなくてはならぬときが来た。

を明ければ、奴は奴、婢は婢の組に入るのである。**^^こ はしため

二人は死んでも別れぬと言った。奴頭が大夫に訴えた。

って往け 大夫は言った。 「たわけた話じゃ。 奴は奴の組へ引きずって往け。 婢は婢の組へ引きず

奴頭が承って起とうとしたとき、二郎がかたわらから呼び止めた。 そして父に言った。

ずかでも、 も別れぬと申すそうでございます。 「おっしゃる通りに 汲む潮はいささかでも、 . 童 どもを引き分けさせてもよろしゅうございますが、 愚かなものゆえ、死ぬるかも知れません。 人手を耗らすのは損でございます。 わたくしがい 童どもは死んで 苅る柴はわ

う言って脇へ向いた。 「それもそうか。 損になることはわしも嫌いじゃ。 どうにでも勝手にしておけ」 大夫はこ

うに計らってやりましょう」

二郎は三の木戸に小屋を掛けさせて、 姉と弟とを一しょに置いた。

ある日 の暮れに二人の子供は、 1 つものように父母のことを言っ ていた。 それを二郎が

盗みをしたりするのを取り締まっているのである。 通り か かって聞いた。二郎は邸を見廻っ て、 強い奴が弱い奴を 虐 げたり、 諍か いをしたり、

よい」こう言って出て行った。 りまた遠い。 郎 は 小屋にはい 子供の往かれる所ではない。 って二人に言った。 「父母は恋しゅうても佐渡は遠い。 父母に逢いたいなら、 大きゅうなる日を待つが 筑紫はそれよ

に弓矢を持っ 郎が通りかかって聞いた。三郎は寝鳥を取ることが好きで邸のうちの木立ち木立ちを、手 ほど経てまたある日の暮れに、 て見廻るのである。 二人の子供は父母のことを言っていた。 それを今度は三

は。 うのだね。 きくなってからでなくては、遠い旅が出来ないというのは、それは当り前のことよ。 あらゆる手立てを話し合って、 人一しょにここを逃げ出しては駄目なの。 したちはその出来ないことがしたいのだわ。 二人は父母のことを言うたびに、どうしようか、こうしようかと、 そしてさきへ筑紫の方へ往って、 それから佐渡へお母さまのお迎えに往くが 夢のような相談をもする。 お父うさまにお目にかかって、 わたしには構わないで、 だがわたしよく思ってみると、どうしても二 V いわ」 きょうは姉がこう言った。 三郎が立聞きをしたのは お前一人で逃げなくて 逢いたさのあまりに、 どうしたらい いか伺 わた 大

あいにくこの安寿の 詞 であった。

三郎は弓矢を持って、つと小屋のうちにはいった。

れがこの 。のでて」 邸の掟じや。 お主たちは逃げる談合をしておるな。逃亡の企てをしたものには烙印をする。

ぬし 赤うなった鉄は熱いぞよ。 そ

あんなことを申しました。 一人の子供は真っ蒼になった。 弟が 一人で逃げたって、 こないだも弟と一しょに、 まあ、 安寿は三郎が前に進み出て言った。 どこまで往かれましょう。 鳥になって飛んで往こうと申したこ あまり親に逢いたい 「あ れはでござい ので、

ともございます。出放題でございます」

厨子王は言った。 「姉えさんの言う通りです。 いつでも二人で今のような、 出来ない

とばかし言って、父母の恋しいのを紛らしているのです」

主たちが一しょにおって、 こう言って三郎は出て行った。 三郎は二人の顔を見較べて、 なんの話をするということを、おれがたしかに聞いておいたぞ」 しばらくの間黙っていた。 「ふん。 **譃**なら**譃**でも

ふと物音を聞きつけて目をさました。今の小屋に来てからは、 る。 その晩は二人が気味悪く思いながら寝た。 そのかすかな明りで見れば、 枕もとに三郎が立っている。 それからどれだけ寝たかわからない。二人は 燈火を置くことが許され 三郎は、 つと寄って、 両

手で二人の手をつかまえる。そして引き立てて戸口を出る。蒼ざめた月を仰ぎながら、

から、 を炭火の真っ赤におこった炉の前まで引きずって出る。二人は小屋で引き立てられたとき 廻ってさきの日に見た広間にはいる。 人は目見えのときに通った、広い馬道を引かれて行く。階を三段登る。 ただ「ご免なさいご免なさい」と言っていたが、三郎は黙って引きずって行くので、 そこには大勢の人が黙って並んでいる。 を通る。 三郎は二人 廻 oc り

しまいには二人も黙ってしまった。 炉の向い側には 茵 三枚を畳ねて敷いて、 山椒大夫がす

わ ている。大夫の赤顔が、座の右左に焚いてある炬火を照り反して、燃えるようである。

三郎は炭火の中から、 初め透き通るように赤くなっていた鉄が、次第に黒ずんで来る。 赤く焼けている 火 を抜き出す。 それを手に持って、 そこで三郎は安寿を しばらく見てい

引き寄せて、 火筋を顔に当てようとする。 厨子王はその肘にからみつく。三郎はそれを蹴倒

を破って響き渡る。三郎は安寿を衝き放して、膝の下の厨子王を引き起し、その額にも火節 膝に敷く。 とうとう火節を安寿の額に十文字に当てる。 安寿の悲鳴が

三郎は火筋を棄てて、 を十文字に当てる。 新たに響く厨子王の泣き声が、 初め二人をこの広間へ連れて来たときのように、 ややかすかになった姉の声に交じる。 また二人の手をつ

かまえる。 そして一座を見渡したのち、広い母屋を廻って、二人を三段の階はし の所まで引き

凍った土の上に衝き落す。二人の子供は創の痛みと心の恐れとに気を失いそうになこぉ

るのを、ようよう堪え忍んで、どこをどう歩いたともなく、三の木戸の小家に帰る。 臥所の

上に倒れた二人は、 しばらく死骸のように動かずにいたが、たちまち厨子王が 「姉えさん

早くお地蔵様を」と叫んだ。安寿はすぐに起き直って、肌の 守 袋 を取り出した。 わなな

く手に紐を解いて、袋から出した仏像を枕もとに据えた。二人は右左にぬかずいた。そのぃぃぃ

とき歯をくい てみれば、 創は痕もなくなった。 しばってもこらえられぬ額の痛みが、掻き消すように失せた。 はっと思って、二人は目をさました。 で額を撫で

尊を取り出して、 二人の子供は起き直って夢の話をした。 夢で据えたと同じように、 同じ夢を同じときに見たのである。 枕もとに据えた。二人はそれを伏し拝んで、 安寿は守本

かすかな燈火の明りにすかして、 地蔵尊の額を見た。 白 毫の右左に、 鏨 で彫ったようなたがね

十文字の疵があざやかに見えた。

二人の子供が話を三郎に立聞きせられて、 その晩恐ろしい夢を見たときから、

目ははるかに遠いところを見つめている。そして物を言わない。日の暮れに浜から帰ると、 子がひどく変って来た。 顔には引き締まったような表情があって、 眉ゅ の根に には皺が寄り、

なにしている。 これまでは弟 \mathcal{O} 山から帰るのを待ち受けて、長い話をしたのに、 厨子王が心配して、 「姉えさんどうしたのです」と言うと「どうもしない 今はこんなときにも詞

の、大丈夫よ」と言って、わざとらしく笑う。

するのを見て、 通りである。 安寿の前と変ったのはただこれだけで、言うことが間違ってもおらず、することも平生のいばい しかし厨子王は互いに慰めもし、慰められもした一人の姉が、 際限なくつらく思う心を、 誰に打ち明けて話すことも出来ない。 変った様子を 二人の子

供の境界は、前より一層寂しくなったのである。

らぬが、 ている。 ややもすると不愛想をする。 たりする。安寿は弟に対する様子が変ったばかりでなく、 家の中で働くことになった。安寿は糸を紡ぐ。厨子王は藁を擣つ。藁を擣つのは修行はいっむ 雪が降ったり歇んだりして、 糸を紡ぐのはむずかしい。 しかし小萩は機嫌を損せずに、 年が暮れかかった。 それを夜になると伊勢の小萩が来て、 小萩に対しても詞少なになって、 いたわるようにしてつきあっ も外に出る為事を止めて、 手伝ったり教え

こともなく、 .椒大夫が邸の木戸にも松が立てられた。 また 族 の女子たちは奥深く住んでいて、出入りすることがまれなので、ラゥムら ホホセご しかしここの年のはじめは何の晴れがましい 賑 き わ

も知らぬ顔をしていることがある。どうかすると、 諍いをすると、きびしく罰せられるのに、こういうときは奴頭が大目に見る。 しいこともない。 ただ上も下も酒を飲んで、 奴の小屋には 殺されたものがあっても構わぬのであ 諍いさか いが起るだけである。 血を流して

来たかと思うように、 寂しい三の木戸の小屋へは、 小萩が話している間は、 折り折り小萩が遊びに来た。 陰気な小屋も春め 婢の小屋の賑わしさを持っ 1 て、 このごろ様子の変 て

っている安寿の顔にさえ、めったに見えぬ微笑みの影が浮ぶ。

三日立つと、 また家の中の為事が始まった。 安寿は糸を紡ぐ。 厨子王は藁を擣つ。 もう

夜になって小萩が来ても、 手伝うにおよばぬほど、安寿は紡錘を廻すことに慣れた。 様子

は変っていても、 こんな静かな、同じことを繰り返すような為事をするには差支えなく、

また為事がかえって一向きになった心を散らし、 \mathcal{O} のように話をすることの出来ぬ厨子王は、 が、 何よりも心強く思われた。 紡いでいる姉に、 落ち着きを与えるらしく見えた。 小萩がいて物を言ってくれる

きょうは小屋小屋を皆見て廻ったのじゃ」 大勢の人のうちには病気でおるものもある。 邸を見廻るついでに、 水が温み、草が萌えるころになった。あすからは外の為事が始まるという日に、二郎がぬる 三の木戸の小屋に来た。 奴頭の話を聞いたばかりではわからぬから、 「どうじゃな。 あす為事に出られるかな。

ございます。 がかがやいている。 やって下さるように、 も似ず、安寿が糸を紡ぐ手を止めて、つと二郎の前に進み出た。 藁を擣っていた厨子王が返事をしようとして、まだ詞を出さぬ間に、 わたくしは弟と同じ所で為事がいたしとうございます。どうか お取り計らいなすって下さいまし」蒼ざめた顔に 紅 「それについてお願いが このごろの様子に がさして、 一しょに山 目

ずにいて、 厨子王は姉の様子が二度目に変ったらしく見えるのに驚き、 突然柴苅りに往きたいと言うのをも 訝 しがって、ただ目をみはって姉をまもっいぎか また自分になんの 相談もせ

お願いでございます、どうぞ山へおやりなすって」と繰り返して言っている 二郎は物を言わずに、 安寿の様子をじっと見ている。 安寿は 「ほかにない、 つの

ばらくして二郎は口を開いた「この邸では奴婢のなにがしになんの為事をさせるといった。

よく思い込んでのことと見える。 た」こう言って小屋を出た。 にしてやる。 重いことにしてあって、 安心しているがいい。まあ、二人のおさないものが無事に冬を過してよかっ わしが受け合って取りなして、 父がみずからきめる。 しかし垣衣、お前の願いはよく きっと山へ往かれるよう

たしに相談しません」 一しょに山へ来て下さるのは、わたしも嬉しいが、 厨子王は杵を置いて姉のそばに寄った。 「姉えさん。 なぜ出し抜けに頼んだのです。 どうしたのです。 それはあなたが なぜわ

あの人の顔を見るまで、 「そうですか。変ですなあ」厨子王は珍らしい物を見るように姉の顔を眺めている 姉の顔は喜びにかがやいている。 頼もうとは思っていなかったの。 「ほんにそうお思い のはもっともだが、 ふいと思いついたのだもの」 わたしだっ て

、にやるのだそうで、わしは道具を持って来た。代りに桶と 杓 をもらって往こう」 奴頭が籠と鎌とを持ってはいって来た。 「垣 衣 さん。お前に汐汲みをよさせて、 柴を苅

「これはどうもお手数でございました」安寿は身軽に立って、桶と杓とを出して返した。

奴頭はそれを受け取ったが、まだ帰りそうにはしない。顔には一種の苦笑 いのような表

情が現われている。 この男は山椒大夫一家のものの言いつけを、 神の託宣を聴くように聴

る。 とを見ずに済めば、 は済まぬとあきらめて、 しんだり、 そこで随分情けない、 泣き叫んだりするのを見たがりはしない。 その方が勝手である。 何か言ったり、 苛酷なことをもためらわずにする。 したりするときに、 今の苦笑いのような表情は人に難儀をかけずに 物事がおだやかに運んで、 この男の顔に現われるのであ しかし生 得とく 人 の 思 ^{もだ} そんなこ え苦

奴頭は安寿に向いて言った。 「さて今一つ用事があるて。 実はお前さんを柴苅りにやる

二郎様が大夫様に申し上げて 拵こし えなさったのじゃ。 するとその座に三郎様がおら

とお笑いなされた。 れ て、 そんなら垣衣を大童 そこでわしはお前さんの髪をもろうて往かねばならぬ にして山へやれとおっ しやった。 大夫様は、 よい思い つきじゃ

に涙を浮べて姉を見た。 そばで聞いている厨子王は、 この詞を胸を刺されるような思いをして聞いた。

た。 らは、 意外にも安寿の顔からは喜びの色が消えなかった。 わたしも男じゃ。 どうぞこの鎌で切って下さいまし」 「ほんにそうじゃ。 安寿は奴頭の前に 柴苅り 項など っに往くか を伸ばし

光沢のある、 長い安寿の髪が、 鋭い鎌の一掻きにさっくり切れた。

椒大夫のところに来てから、二人一しょに歩くのはこれがはじめである。 あくる朝、 二人の子供は背に籠を負い腰に鎌をして、 手を引き合って木戸を出た。 Щ

をか考えているらしく、 11 る。 厨子王は姉の心を忖りかねて、 きのうも奴頭の帰ったあとで、 それをあからさまには打ち明けずにしまった。 寂しいような、 いろいろに詞を設けて尋ねたが、 悲しいような思いに胸が 姉はひとりで何事 <u>~</u> ぱ 1 になっ て

ません。 ぶりで一しょに歩くのだから、 の麓に来たとき、 わたしはこうして手を引いていながら、 厨子王はこらえかねて言った。 嬉しがらなくてはならないのですが、 あなたの方へ向い 「姉えさん。 て、 わたしはこうして どうも悲しくてなり その になったお

を見ることが出来ません。 姉えさん。 あなたはわたしに隠して、 何か考えていますね。

なぜそれをわたしに言って聞かせてくれないのです」

安寿はけさも毫光のさすような喜びを額にたたえて、 大きい目をかがやか してい

かし弟の詞には答えない。 ただ引き合っている手に力を入れただけである。

.に登ろうとする所に沼がある。 汀 には去年見たときのように、枯れ葦が縦横に乱れて

11 るが、 道端の草には黄ばんだ葉の間に、もう青い芽の出たのがある。沼の から右に折

つつ、 れて登ると、 うねった道を登って行くのである。 そこに岩の隙間から清水の湧く所がある。そこを通り過ぎて、岩壁を右に見った。

をおろして、 ちょうど岩の 面^{ぉもて} 小さい に朝日が一面にさしている。安寿は畳なり合った岩の、 菫 の咲いているのを見つけた。そしてそれを指さして厨子王に見せてサッムル 風化した間に根

厨子王は黙ってうなずいた。 姉は胸に秘密を蓄え、 弟は憂えばかりを抱い ているので、

言った。

「ごらん。

もう春になるのね」

とかく受け応えが出来ずに、話は水が砂に沁み込むようにとぎれてしまう。

で苅るのです」 去年柴を苅った木立ちのほとりに来たので、厨子王は足を駐めた。 「ねえさん。

もっと高い所へ登ってみましょうね」安寿は先に立ってずんずん登って行く。 厨

子王は訝ら べき所に来た。 りながらついて行く。しばらくして雑木林よりはよほど高い、外山の頂とも言う゛

聞き。 でしょうね。 前から考えごとをしていて、お前ともいつものように話をしないのを、 川の上流をたどって、一里ばかり隔った川向いに、 の尖の見える中山に止まった。そしてきき 安寿はそこに立って、 小萩は伊勢から売られて来たので、 もうきょうは柴なんぞは苅らなくてもいい 南の方をじっと見ている。 「厨子王や」と弟を呼びかけた。 故郷からこの土地までの道を、 目は、 こんもりと茂った木立ちの中から、塔 から、 石浦を経て由良の港に注ぐ大雲 わたしの言うことをよくお 変だと思っていた 「わたしが久し わたしに話して 11

す。 が、 聞 11 かせたがね、 人の運が開けるものなら、 お母あさまとご一しょに岩代を出てから、 引き返して佐渡へ渡るのも、 あの 中山を越して往けば、 よい人に出逢わぬにも限りません。 たやすいことではないけ 都がもう近い わたしどもは恐ろし のだよ。 れど、 筑紫へ往くの 都 1 お前はこれか 人にば へはきっと往かれま カュ はむず り出逢った ら思い

出逢ったら、 \mathcal{O} て、 お迎えに往くことも出来よう。 この土地を逃げ延びて、どうぞ都へ登っておくれ。 筑紫へお下りになったお父うさまのお身の上も知れよう。 籠や鎌は棄てておいて、 神仏とけ だけ持って往くのだよ のお導きで、 佐渡へお母あさま ょ 11 人にさえ

たはどうしようというのです」 厨子王は黙って聞い ていたが、 涙が頬を伝って流れて来た。 「そして、姉えさん、 あな

ておくれ。 しをたすけに来ておくれ」 「わたしのことは構わないで、 お父うさまにもお目にかかり、 お 前 人ですることを、 お母あさまをも島からお連れ申した上で、 わたしと一しょにするつもり

をせられた、 「でもわたしがいなくなったら、あなたをひどい目に逢わせましょう」厨子王が心には烙 恐ろしい夢が浮ぶ。 印がん

は苅 鎌をあそこに置いて、 でしょう。 人たちは殺しはしません。 「それはいじめるかも知れないが ħ ない お前 で Ŕ の教えてくれた木立ちの所で、 四荷でも五荷でも苅りましょう。 お前を麓へ送って上げよう」こう言って安寿は先に立って降りて行 多分お前がいなくなったら、 ね わたしは我慢して見せます。 わたしは柴をたくさん苅ります。 さあ、 わたしを二人前働かせようとする あそこまで降り 金で買った て行 0 六荷まで て、 \mathcal{O}

厨子王はな んとも思い定め かね て、 ぼ んやり してつ V て降 ŋ る。 姉は今年十五になり、

弟は十三になっているが、 女は早くおとなびて、 その上物に憑かれたように、

なっているので、厨子王は姉の詞にそむくことが出来ぬのである。

この地蔵様をわたしだと思って、護り刀と一しょにして、大事に持っていておくれ 木立ちの所まで降りて、二人は籠と鎌とを落ち葉の上に置いた。 それを弟の手に渡した。 「これは大事なお守だが、こんど逢うまでお前に預けます。 姉は守本尊を取り出し

「でも姉えさんにお守がなくては」

 \vec{v} いえ。 わたしよりはあぶない目に逢うお前にお守を預けます。晩にお前が帰らないと、

の見えていたお寺にはいって隠しておもらい。 れるにきまっています。 て来たあとで、寺を逃げておいで」 つけられずに、向う河岸へ越してしまえば、 きっと討手がかかります。 さっき見た川の上手を和江という所まで往って、首尾よく人に見 お前がいくら急いでも、 中山までもう近い。 しばらくあそこに隠れていて、 あたり前に逃げて行っては、 そこへ往ったら、 討手が帰っ 追いつか あの塔

「でもお寺の坊さんが隠しておいてくれるでしょうか」

「さあ、 それが運験しだよ。 開ける運なら坊さんがお前を隠してくれましょう」

です。 「そうですね。 わたしは考えをきめました。 姉えさんのきょうおっしゃることは、まるで神様か仏様がおっしゃるよう なんでも姉えさんのおっしゃる通りにします」

さまやお母あさまにも逢われます。 同じようにかがやいて来た 「そうです。 よく聴いておくれだ。坊さんはよい人で、きっとお前を隠してくれます」 わたしにもそうらしく思われて来ました。 姉えさんのお迎えにも来られます」厨子王の目が姉と 逃げて都へも往かれます。 お父う

「さあ、麓まで一しょに行くから、早くおいで」

に弟に移って行ったかと思われる。 二人は急いで山を降りた。 足の運びも前とは違って、 姉の熱した心持ちが、 暗示の

泉の湧く所へ来た。姉はに添えてある木の椀を出して、清水を汲んだ。「これがお前の門出ャーキー

を祝うお酒だよ」こう言って一口飲んで弟にさした。

山まで参ります_ 弟は椀を飲み干した。 「そんなら姉えさん、 ご機嫌よう。 きっと人に見つからずに、 中

そして大雲川の岸を上手へ向かって急ぐのである。 厨子王は十歩ばかり残っていた坂道を、 一走りに駆け降りて、 沼に沿うて街道に出た。

安寿は泉の 畔 に立って、並木の松に隠れてはまた現われる後ろ影を小さくなるまで見送

方角の山 た。 そして日はようやく午に近づくのに、 で木を樵る人がないと見えて、坂道に立って時を過す安寿を見とがめるものもな 山に登ろうともしない。 幸いにきょうはこの

のちに同胞を捜しに出た、 山椒大夫一家の討手が、 この坂の下の沼の端で、 小さい藁履 カコ

った。

を一足拾った。それは安寿の履であった。

中 山の国分寺の三門に、 松明の火影が乱れて、たいまつ 大勢の人が籠み入って来る。 先に立った

のは、白柄の薙刀を手挾んだ、山椒大夫の息子三郎である。しらつか、なぎなた たはさ

三郎は堂の前に立って大声に言った。 「これへ参ったのは、 石浦の山椒大夫が のもの

出 じ れ場は寺内よりほかにはない。すぐにここへ出してもらおう」ついて来た大勢が、 してもらおう、 大夫が使う 奴ゃっこ 出してもらおう」と叫んだ。 の一人が、 この山に逃げ込んだのを、 たしかに認めたものがある。

持 った、 本堂の前から門の外まで、 三郎が手のものが押し合っている。 広い石畳が続いている。 また石畳の両側には、 その石の上には、 境内に住んでいる限り 今手に手に松明を

 \mathcal{O} 僧俗が、 ほとんど一人も残らず 簇 っている。これは討手の群れが門外で騒いだとき、 内

陣 いからも、 庫裡からも、 何事が起ったかと、 怪しんで出て来たのである。

め討手が門外から門をあけいと叫んだとき、 あけて入れたら、 乱暴をせられはすまい

っそりとしている。 し今三郎が大声で、 かと心配して、 あけまいとした僧侶が多かった。 逃げた奴を出せと言うのに、 それを住持曇猛律師があけさせた。 本堂は戸を閉じたまま、 しばらくの 間ひ

どうしたのだ」と呼ぶものがある。 三郎は足踏みをして、 同じことを二三度繰り返した。 それに短い笑い声が交じる。 手のもののうちから「和尚さん、

偏衫一つ身にまとって、なんの威儀をも 繕 わず、ヘヘタӗメ ようようのことで本堂の戸が静かにあいた。 曇猛律師が自分であけたのである。 常燈明の薄明りを背にして本堂の階 律師は \mathcal{O}

された。 上に立った。 律師はまだ五十歳を越したばかりである。 丈の高い 巌 ^{がんじょ} 畳な体と、 眉のまだ黒い廉張った顔とが、 揺めく火に照らしゅら

律師はしずかに口を開いた。騒がしい討手のものも、 律師の姿を見ただけで黙ったので、

わずに人は留めぬ。 隅々まで聞えた。 わしが知らぬから、そのものは当山にいぬ。 「逃げた下人を捜しに来られたのじゃな。 それはそれとして、 当山では住持のわしに言

に剣戟を執って、 多人数押し寄せて参られ、 三門を開けと言われた。 さては国に大乱でも

起ったか、 の叛逆人でも出来たかと思うて、三門をあけさせた。それになんじゃ。御身ははぎゃくにん

が家の下 -人の詮議か。 当山は勅願の寺院で、三門には勅額をかけ、 七重の塔には宸翰金字の

経文が蔵めてある。 ^{ぉさ} ここで狼藉を働かれると、 国のかみ は 検 校 校 の責めを問わ れるのじゃ。

また総本山東大寺に訴えたら、 都からどのような御沙汰があろうも知れぬ。

言って律師はしずかに戸を締めた。 うてみて、 早う引き取られたがよかろう。 悪いことは言わぬ。 お身たちのためじゃ」こう

カゝ った。 このとき大声で叫ぶものがあった。「その逃げたというのは十二三の小わっぱじゃろう。 三郎は本堂の戸を睨んで歯咬みをした。 手のものどもはただ風に木の葉のざわつくようにささやきかわしている。 しかし戸を打ち破って踏み込むだけの勇気もな

三郎は驚い て声の主を見た。 父の山椒大夫に見まごうような親爺で、この寺の鐘楼守で それならわしが知っておる」

ある。 の外を通って南へ急いだ。 親爺は詞を続いで言った。「そのわっぱはな、 かよわい代りには身が軽い。もう大分の道を行ったじゃろ」 わしが午ごろ鐘楼から見ておると、築泥

松明の行列が寺の門を出て、 築泥の外を南へ行くのを、 鐘楼守は鐘楼から見て、大声で

「それじゃ。

半日に童の行く道は知れたものじゃ。

続け」と言って三郎は取って返した。

立った。 笑った。 近い木立ちの中で、ようよう落ち着いて寝ようとした 鴉 が二三羽また驚いて飛び

聞いて来た。 11 て来た。 あくる日に国分寺からは諸方へ人が出た。 南の方へ往ったものは、三郎の率いた討手が田辺まで往って引き返したことを 石浦に往ったものは、 安寿の入水のことを聞

中二日おいて、曇猛律師が田辺の方へ向いて寺を出た。 盤が ほどある鉄の受糧器を持って、

行く。 腕の太さの 杖を衝いている。 あとからは頭を剃りこくって三衣を着た厨子王がついて

二人は真昼に街道を歩いて、 夜は所々の寺に泊った。 山城の朱雀野に来て、 律師は権現

堂に休んで、 厨子王に別れた。 「守本尊を大切にして往け。 父母の 消息はきっと知 れる」

と言い は思った 聞かせて、 律師は 踵 を 旋 した。 亡くなった姉と同じことを言う坊様だと、 厨子王

都に上った厨子王は、 僧 形 形 形になっているので、東山の清水寺に泊った。

とに立っ 籠も 堂 に寝て、 ていて言った。 あくる朝目がさめると、 「お前は誰の子じゃ。 直衣に烏帽子を着て指貫をはいた老人が、のうし、えぼし 何か大切な物を持っ ているなら、 どうぞお

れに見せてくれ おれは娘の病気の平癒を祈るために、 ゆうべここに参籠した。 すると

ませいということじゃ。 夢にお告げがあった。 左の格子に寝ている けさ左の格子に来てみれば、 童からわ がよい守本尊を持っている。 お前がいる。 どうぞおれに身の上を それを借りて拝

明 して、 守本尊を貸してくれい。 おれは関白師実じや」

れました。 出ますと、 が大ぶ大きくなったので、 に筑紫の安楽寺へ往ったきり、 厨子王は言った。 三つになる姉とを連れて、 恐ろしい 姉は由良で亡くなりました。 人買い 姉とわたくしとを連れて、 に取られて、 岩代の信夫郡に住むことになりました。 帰らぬそうでございます。 わたくしの持っている守本尊はこの地蔵様でござ 母は佐渡へ、 父を尋ねに旅立ちました。 姉とわたくしとは丹後 母はその年に生まれたわたくし そのうちわたくし 父は十二年前 \mathcal{O} 由 越後まで 良へ売ら

師 実は仏 像を手に取って、 まず額に当てるようにして礼をした。 それ から 面背を打ち 返

11

ます」こう言って守本尊を出して見せた。

し打ち返し、 丁寧に見て言った。 「これはかねて聞きおよんだ、 尊い放光王地蔵菩薩の金像

じゃ。 百済の 国から渡ったのを、 高見王が持仏にしておいでなされた。 これを持ち伝えてお

るからは、 お前の家柄に紛れはない。 仙洞がまだ御位におらせられた永保の初めに、せんとう。 みくらい えいほう 玉

守 \mathcal{O} 達き 格に連座して、 筑紫へ左遷せられた平 正 たいらのま 氏が嫡子に相違あるまい。 もし還俗っ \mathcal{O}

望みがあるなら、 追っては受領の御沙汰もあろう。 まず当分はおれの家の客にする。 おれ

と一しょに館へ来い

関白師実の娘とい ったのは、 仙洞にかしずいている養女で、 実は妻の姪である。 この

は久しい 間病気でいられたのに、厨子王の守本尊を借りて拝むと、すぐに拭うように本復せ

られた。

たせて、 師実は厨子王に還俗させて、自分で 安否を問いに使いをやった。 おんむり しかしこの使いが往ったとき、 を加えた。同時に正氏が謫所へ、たくしょ 正氏はもう死んでい 放免じ 状が

た。 元服して正道と名のっている厨子王は、 身のやつれるほど歎 いた。

その年の秋の除目に正道は丹後の国守にせられた。 これは遙授の官で、 任国には自分で

で人の売り買いを禁じた。そこで山椒大夫もことごとく奴婢を解放して、 往かずに、 をおいて治めさせるのである。 しかし国守は最初の として、 給料を払うこと 丹後一国

にした。大夫が家では一時それを大きい損失のように思ったが、このときから農作も工匠

業も前に増して盛んになって、 一族はいよいよ富み栄えた。国守の恩人曇猛律師は僧都に

せられ、 国守の姉をいたわった小萩は故郷へ還された。安寿が亡きあとはねんごろに

れ、また入水した沼の畔には尼寺が立つことになった。

正 道は任国のためにこれだけのことをしておいて、 特に仮寧を申し請うて、 微行して佐

渡へ渡った。

たが 佐渡の国府は雑太という所にある。 母の行くえは容易に知れなかった。 正道はそこへ往って、 役人の手で国中を調べてもら

立ち並んだ所を離れて、畑中の道にかかった。空はよく晴れて日があかあかと照ってい ある日正道は思案にくれながら、 一人旅館を出て市中を歩いた。 そのうち VI 0 カゝ 人家の

正道は心のうちに、 「どうしてお母あさまの行くえが知れないのだろう、 もし役人なんぞ

に任せて調べさせて、 自分が捜し歩かぬのを神仏が憎んで逢わせて下さらないのではある

まい

か」などと思いながら歩いている。ふと見れば、

大ぶ大きい百姓家がある。

家の南側

のまばらな生垣のうちが、 土をたたき固めた広場になっていて、 その上に一面に 蓆 が敷

11 てある。 蓆には 刈り取っ た粟の穂が干してある。 その真ん中に、 襤褸を着た女がす b 0

ぶやく。 て、手に長い竿を持って、 雀の来て啄い むのを逐っている。 女は何やら歌のような調子でつ

正道はなぜか知らず、この女に心が牽かれて、立ち止まってのぞいた。 女の乱れた髪は塵ょり

に塗れている。 顔を見れば 盲がしい である。 正道はひどく哀れに思った。

そのうち女のつぶやい を た おこりやみ

てい

る詞が、

次第に耳に慣れて聞き分けられて来た。

それと同時に正道は

のように身

うちが震って、 目には涙が湧いて来た。 女はこういう詞を繰り返してつぶやい ていたので

安寿恋しや、 ほうやれ

厨子王恋しや、 ほうやれほ

生あるもの なれば、

疾う疾う逃げよ、 逐わずとも。

正道はうっとりとなって、この詞に聞き惚れた。そのうち臓腑が煮え返るようになって、

獣 めいた叫びが口から出ようとするのを、歯を食いしばってこらえた。たちまち正道は縛サュ。

女の前に俯伏した。右の手には守本尊を捧げ持って、俯伏したときに、タゥーム それを額に押し当

られた縄が解けたように垣のうちへ駆け込んだ。そして足には粟の穂を踏み散らしつつ、

てていた。

女は雀でない、大きいものが粟をあらしに来たのを知った。 そしていつもの詞を唱えや

めて、見えぬ目でじっと前を見た。そのとき干した貝が水にほとびるように、両方の目に 潤ゥーヌル

いが出た。女は目があいた。

「厨子王」という叫びが女の口から出た。二人はぴったり抱き合った。

大正四年一月

底本:「日本の文学 3 森鴎外(二)」中央公論社

1972(昭和 47)年 10 月 20 日発行

入力:真先芳秋

校正:野口英司

1998年7月21日公開

2006年5月16日修正

青空文庫作成ファイル:

このファイルは、 インターネットの図書館、 青空文庫 (http://www.aozora.gr.jp/) で作

られました。 入力、 校正、 制作にあたったのは、 ボランティアの皆さんです。